SY2-4

SNS 全盛期における予防接種とメディア ～ covid19 の経験から～

熊井　洋美
朝日新聞東京本社　くらし報道部（医療担当）

新型コロナウイルス感染症の流行拡大期、子どもの罹患や症状の程度は大勢の関心事であった。従来株の流行時は比較的かかりにくいとされる一方で、ＭＩＳ－Ｃなど小児に顕著な後遺症の傾向も欧米で報告されてきた。その後ウイルスは、変異株出現のたびに感染力を増し、子どもたちへの感染も広がったことは周知のとおりである。

そのなかでワクチンは、発症予防、重症化予防に有効であり、子どもが使える治療薬の選択肢が極めて乏しいなかでは唯一の武器とも認識された。もちろん一方でリスクゼロではないため、一定の頻度で副反応も起きる。

今回の covid19 の場合、小児のワクチンへの関心は、米国で接種が始まった 2021 年秋ごろから高まり、国内での接種開始の手続きに向けて厚生労働省の専門家による会議で審議が進んだ 2022 年の初め～春ごろに最も盛り上がったと認識している。マスメディアの報じ手として意識していたのは、現時点で知りうる限りのデータを読み手の皆様に提示すること、リスクとベネフィットの双方について具体的にイメージしやすいように伝えることだった。１０代後半～２０代に頻度が高かった心筋炎の報告はあまりなかったことも併せて丁寧に報じることを心がけた。

記者が取材を経験した 2009 年の新型インフルＨ 1N 1、Hib や小児肺炎球菌のワクチンの定期接種化時との大きな違いは、専門家の提言や解説、報道機関のニュースに加えてＳＮＳによる発信が盛んとなり影響力を持ってきたことだ。ワクチンについて否定的見解を持つ人たち（実体が見えない）の発信が飛び交うなかで、感染症を専門とする医師有志による様々な形での発信も存在感が大きかった。

新聞という媒体の発信者から見たワクチンへの期待（と忌避感情）、リスク＆ベネフィットのとらえ方、情報発信の限界を感じた部分を振り返りつつ、次の感染症の発生時に備えるべきことについて考えてみたい。

Presented by Medical*Online